様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：２４５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2016
課題番号：２５８７０６２９

研究課題名（和文）中国近代文学における白話文体形成とジャンル間影響：欧化・方言・文言吸収の諸相から

研究課題名（英文）A study on the formation of colloquial Chinese in modern fiction and the interaction among literary genres: from the viewpoints of the westernization, the impact of dialect and classical Chinese

研究代表者
津守　陽（TSUMORI, Aki）

神戸市外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：２０６０９８３８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、五四期に誕生した白話の小説文体が、1930～40年代にどのように各作家の文体の中に定着し流通していったのかを考察するものである。「文体作家」と称された沈従文を中心に、その「文体史」上の意義を位置づけた。成果として指摘したのは、主に以下の三点である。（１）沈従文後期作品における難解な「抽象表現」の重要性（２）ジェンダー論・ナショナリズム論から見た沈従文の他者表象の意義（３）小説家による詩論の意義。
同時に、「文学形式」をめぐって、若手研究者の国際的共同研究グループを立ち上げ、連続ワークショップという形で研究交流を継続的に進める土台を作った。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to examine how Chinese authors adapted and developed colloquial Chinese style in their works from the 1930s to 40s. The study focused on Shen Congwen, who was a famous novelist as a “stylist”, analyzing his fictional techniques and arguing his position in the history of colloquial Chinese writings. I claimed three new points of importance for Shen’s literary styles in this study. First, Shen’s literary “experiments” in 1940s are tightly related to the poetic issues in modern China. Second, Shen’s fictional images of women opened up new possibilities for depicting the “others”. Third, Shen started his awareness of literary style through writing essays on poetics.
In order to activate international research exchange on this issue, I also launched a collaborative research group as well as started a series of workshops.

研究分野：中国文学

キーワード：沈従文　文体論　詩化／散文化　文学形式　文学ジャンル　ジェンダー　ナショナリズム

１．研究開始当初の背景

（１）文体のダイナミクス

あるテクストの持つ文体（Style）が、そのテクストの印象や影響力を大きく左右することは常識的に知られている。文体は個々の作者による意図的選択の他に、ジャンル規定や時代性、社会要請の影響を受ける。複雑な力学の交差点に成立する「文体」とは、ある面でストーリーなどの「表現内容」以上に時代を映す鏡だと言える。中国の前近代ではジャンル規定が文体選択に決定的な働きを及ぼしていたが、近代に入ると外来語の影響の下にジャンル間の相互吸収が起こり、文体の変化はダイナミックに動き始める。従来中国近代文学史の記述は必ず清末民初を焦点として白話文体の形成の話題から説き起こされ、近年は特に近代白話文体の「起源」を探る研究が、文学と言語学の双方のアプローチから多く行われてきた。ただし「起源」に関する研究が充実に向かう一方で、そうして生み出された白話文体が、創作の言語として流通していく 1930 年以降において、どのように流布され「定着」したのかについては、研究の余地が大きく残されている状態である。

（２）統合的文体研究の必要性

また近代中国の白話文体に関する研究は、①大衆語論争などの議論の整理②言語学的アプローチによる文体論③個々の作家文体論、の３方向に分化する傾向にあり、これらを統合した視点に欠けている。

２．研究の目的

上記を踏まえて、本研究では白話文体の形成と成熟の様相を作家間・流派間・ジャンル間の相互影響から探ることを試み、特に以下の三点を明らかにすることを目指した。

（１）文体と文学ジャンルとの関わり

民国期において、新しく区分された各ジャンル独自の文体やリズムを築く必要性が叫ばれる一方で、「詩の散文化」「小説の詩化」がしばしば議論されたように、ジャンル間の文体相互吸収の現象は意識され続けていた。実際の作品において、ジャンル間の影響関係はどのように観察されるのか。

（２）新しい文体における、異素材吸収の諸相

「方言使用」「欧化」「文言的リズム」が個々の作家の作品においてどのように現れ、作家間や流派間でどのように影響・模倣関係が見られるか。

（３）文体と表現内容の連関

新しい文体によってどのような表現、特に新文学独自の「抒情」（周作人）が可能になったのか。

３．研究の方法

当初は廃名・沈従文・汪曾祺など文体意識が強いとされる作家の文体分析や、「土白入詩」「格律詩」など新月詩派の小説創作への影響、周作人・兪平伯をはじめとする小品文・随筆文体と小説文体との相互影響など、「広く浅い」比較を行う予定であったが、それでは当初想定していたよりもはるかに不明瞭な軌跡しか描けないことがわかった。このためすでに研究の蓄積のある沈従文を研究の中心に据える形で、以下のように問題と方法を再設定した。

（１）沈従文の文体とそのポリティクスの分析

「文体作家」と呼ばれる沈従文であるが、その具体的な解析は意外に進んでいない。本研究では、特に「郷里空間像」「女性像」「抽象表現の追求による詩化現象」の三点に重点を置いてその特徴を整理した。そして今日的な視点、特にジェンダー論とナショナリズム論の文脈において眺めた時、その描写技法がどのような意義を持つかを検討した。

（２）沈従文の詩論の位置づけ

小説家・散文家として知られる沈従文であるが、編集者や大学教員の立場から多くの詩論をものしている。1930～40 年代に起こった「小説の詩化／散文化」現象を考察するための基礎作業として、「詩化小説」の代表的作家の一人でもある沈従文の詩論を整理し、同時代の詩論のなかに位置づけることを試みた。

（３）共同研究の立ち上げ

交付申請当初から想定していたように、本課題の研究視野および関連する研究領域は非常に広く、個人が短期間で有効なヴィジョンを築くことは困難である。このため関心を共有する国内外の若手研究者に声をかけ、連続ワークショップという形で継続的に共同研究を行っていくための土台を立ち上げた。

（４）日中戦争期を中心とした資料収集

1930 年代後半以降の日中戦争期には、「救亡」のスローガンに文芸界が覆い尽くされる一方で、緻密な文体意識を研ぎ澄ませた作品群も生み出されている。沈従文が投稿した雑誌を中心に、当時昆明や桂林で発行された『戦国策』『（香港）大公報・文芸』『中国作家』『創作月刊』『文学雑誌』『T’ien hsia monthly』『文飯小品』などの閲読・複印を行った。

４．研究成果

上記の方法に基づき、研究期間内に 4 本の論文執筆と 5 回の学会発表を行った。得られた成果は以下の通りである。

（１）沈従文の文体とそのポリティクスの分析

①従来難解だとされてきた 1940 年頃の後期沈従文作品について、「五感」「音楽」「絵画」への追求を切り口に解析した。沈従文が 1938 年の昆明移住を境に湘西中心の題材か

ら離れ、抽象性の高い作風へ転じたことはよく知られる。1940 年代の「燭虚」「看虹録」「水雲」などをピークとする実験的作品群は、複雑に錯綜する作家の思考ゆえに、研究はなお難航している。本論文はこの時期の作品集『七色魘』を対象に、五感をめぐる描写の推移に着目して彼の文学実験の様相を探った。前期の「湘行散記」などにおける沈従文の風景描写は、意味を排除した聴覚と嗅覚による事物の提示であり、近代的「風景の誕生」と別文脈にあった。しかし『七色魘』から読み取れるのは、聴覚と視覚の間で揺れ動き、視覚的意味を盛り込んだ「風景描写」を経て、やがて音楽＝自然への全面帰依へと逃避的に向かう、作家の彷徨の軌跡である。感覚をめぐる沈従文の葛藤は、「抽象」「自然」「象徴」をめぐる近代中国の詩的課題と密接に関係しつつ、沈従文の「20 世紀最後のロマン派」という自称を多元的に理解する糸口を与えてくれる。本論文は高い評価を受け、第 10 回太田勝洪記念中国学術研究賞を受賞した。

②ハーバード大学で開催された沈従文国際シンポジウムに参加し、沈の「田舎者」像に見える内面描写の技法を分析した。彼の「静かに微笑んでいる」田舎者の形象を、「不可解な他者」と神秘化してしまうことの危険性を指摘したうえで、彼が内面を「描写する」ことの必要性と、饒舌な描写によって内面を描きたくないという心情とのディレンマに挟まれていたことを指摘。そのディレンマを出発点として、沈従文がいかに「描かない」という反描写の手法を用い、「沈黙」と「微笑」、「黄昏や火の凝視」、および「孤独」を組み合わせることで、独自の田舎者形象を築き上げたのかを論じた。

③沈従文の女性像に関する先行研究を整理し、それらが従来沈の女性像を「健康的で純粋な田舎娘像」と「頽廃した都市の女性像」の二項対立に単純化しがちであったことを指摘。そのうえでフェティシズムを切り口とし、沈の「頭髪」描写を例にとって分析した。これにより、三つの重要な論点を提示した。第一に、沈従文の女性像を含む都市描写が、当時の恋愛と性をめぐるディスクールに強く刺激された知識人の焦燥を体現していること。第二に、沈が理想化された純粋な田舎娘像を生み出す手法は、そもそも都市の女性像とその性的目覚めを描く描写にヒントを得たものであったこと。第三に、あくまで外形の描写にこだわる沈従文のフェティシスティックな眼差しが、逆説的に「語り得ぬ他者」を描く可能性を切り開いたことを論じた。

（２）沈従文の詩論の位置づけ

沈従文の詩論を整理し、詩論単体としての達成度よりも、小説家としての沈従文の文体形成にどのような影響を与えたかという視点から議論した。これにより、彼が評論活動を通して「近代詩史・文体史」や「文学の形式」への関心を強め、やがて「文字」と「生命」を中心とする独自の文学観を築いていったことを指摘した。沈従文後期の抽象表現の追求は、この延長線上に発生したものと考えられる。これにより、民国後期の文体的成熟と実験性を代表する「詩化小説」群が生み出された背景に、新文学教育や文芸評論の制度的成立と、ひとりの作家が主流イデオロギーと対峙する中で見つめた、「詩／散文／小説に固有の形式」というジャンル境界の意識があったことを提示した。論文は現在査読を通過して改稿中である。

（３）共同研究の立ち上げ

ジャンル、文体、言語など、あらゆる「文学形式」に関心を抱く若手を中心とした研究者を組織し、１年に２回のペースでそれぞれの本拠地において継続的にワークショップを開くという試みを開始した。参加者は北京大学・中国社会科学院・武漢大学・香港教育大学・琉球大学・北九州市立大学・東京大学・韓国科学技術院 KAIST など、国内外の様々な研究機関に勤める研究者である。第一回は 2016 年 6 月に北京大学にて「跨文化語境中的文化形式」工作坊、第二回は 2016 年 12 月に大阪にて「20 世紀東アジア：越境する文学形式と思考の流動」と題し、一連の国際学術ワークショップを開催した。

（４）今後の展望

新プロジェクト「20 世紀中国の文学形式と抒情の定型―ジャンル・言語・地域の越境面から見る」への連携

2017 年度からは、改めて 4 名の連携研究者と共に、科研費基盤（C）の援助を得て研究グループを始動している。この研究では、20 世紀中国における文学の言語・文体・ジャンルといった「形式」と、思想・抒情・思考といった「内容」との間に、いかなる連動あるいは緊張の関係が生じてきたのかについて、各ジャンル間・異言語文化間・多地域間における越境に重点をおく東アジア全体の比較視野のもとに捉えることを目的とする。

沈従文を中心として進めてきた本研究で得られた知見を基礎とし、今後は近代中国の「詩情」とジャンルとの関係、あるいは「詩情」のポリティクスについて、近代日本の詩論との比較を視野に入れながら、研究を進めていく予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

1. 津守陽、「従“気味”的追随者到“音楽”的崇拝者――沈従文《七色魘》集的彷徨軌跡」、『漢語言文学研究』、査読あり、第 7 巻第 4 期、20-33 頁、2016 年 12 月

2. 津守陽、「沈従文のフェティシズム――髪のエクリチュールと身体化される〈都市／郷土〉」、『中国文学報』、査読あり、第 87 冊、46-88 頁、2016 年 4 月
3. 津守陽、「“郷土”是怎様煉成的――沈従文白与黒郷村少女形象的内涵」、『文学評論叢刊』、査読あり、第 15 巻第 2 期、33-46 頁、2014 年 6 月
4. 津守陽、「「におい」の追跡者から「音楽」の信者へ――沈従文『七色魘』集の彷徨と葛藤」、『中国研究月報』、査読あり、第 67 巻第 12 号、3-23 頁、2013 年 12 月

〔学会発表〕（計　5 件）
1. 津守陽、「“傍観者”的詩論――由沈従文的詩歌評論看新文学“散文化／詩化”現象」、ワークショップ「跨文化語境中的文学形式」、2016 年 6 月 24 日、北京大学、北京（中国）
2. 津守陽、「民族、辺疆与自我想象――沈従文与“郷土中国”的現代性再考」、国際シンポジウム「中国現代文学文献学的理論与実践」、2016 年 4 月 10 日、長沙理工大学、長沙（中国）
3. 津守陽、「沈従文、辺境を書くことのディレンマ」、日本現代中国学会第 65 回全国学術大会、2015 年 10 月 25 日、同志社大学（京都府・京都市）
4. 津守陽、“Rethinking the Sorrow behind the “Silent Smile”: Shen Congwen’s description of the inner sentiments of his characters and why he identified himself as a “country people””, International Symposium: Shen Congwen and Modern China, 25-26 September 2015, Harvard University, Boston (US)
5. 津守陽、「從氣味到色彩、從蟲鳥聲到人語聲――沈従文《七色魘》初探」、「名古屋シンポジウム　分裂の物語・分裂する物語　大分裂時代的叙事―大陸・台湾・香港・馬来半島」、2013 年 8 月 4 日、愛知大学（愛知県・名古屋市）

〔その他〕
ホームページ等
国際学術ワークショップ 20 世紀東アジア：越境する文学形式と思考の流動（二十世紀東亞：跨境的文學形式與思想流動）告知ページ
http://www.kobe-cufs.ac.jp/news/2016/18669.html

６．研究組織
(1)研究代表者
津守陽（TSUMORI, Aki）
神戸市外国語大学・外国語学部・准教授
研究者番号：20609838